

鹿児島県国保連合会

KOKUHO KAGOSHIMA

2016.

No.595

国保

# かごしま



特集

快適な環境と医療サービスの充実で

## 市民の健康を支える病院づくり

平成28年度 九州都市国民健康保険研究協議会

国民健康保険制度の改革に向けて、  
一歩一歩課題を解決していく

市町村の取り組み

特定健診の受診促進の取り組み(東串良町)  
年1回健診いっど！が合い言葉

保健師の目線

肝臓の仕事と糖尿病の話

保健活動を考える自主的研究会  
保健師 門田 しづ子



いっぺこっぺ さるこう かごしま

枕崎のまちなかに「枕崎らしさ」を求めて

かごしま探検の会 代表理事 東川 隆太郎

# 快適な環境と医療サービスの充実で 市民の健康を支える病院づくり

総務省が発表した2015年国勢調査の「1%抽出速報」によると、総人口に占める65歳以上の割合（高齢化率）は、調査開始以来最高の26.7%となり、初めて高齢者が4人に1人の割合を超えた。歯止めのかからない高齢化が地域の維持に大きく影響しそうだ。高齢者が住み慣れた地域で、最期まで安心して暮らしたい。それは誰しもが願うことかもしれない。そんな中、坊津地域で唯一入院施設を備えた医療機関で、住民にとつて欠かすことのできない国保直営診療施設を取材するため、南さつま市立坊津病院を訪れた。



坊津

(上)「親切」「思いやり」をモットーに患者に寄り添う  
鷺山健一郎院長  
(下)地域の拠点病院として44床を抱える坊津病院

南さつま市の西南端に位置する坊津地域は、かつては伊勢の安濃津、筑前の博多津とともに日本三津の一つに数えられた港町「坊津」として、中世後期を中心に対外貿易の要港として繁栄し、往時をしのばせる文化財等が数多く残されている。リアス式海岸のおりなす景勝の地としても知られており、一部は国の名勝に指定されている。坊津地域の北部に位置する秋目浦は、753年に唐の高僧鑑真大和尚が苦難の末、日本への一步を記した地である。鑑真記念館のある一帯が秋目浦で、鑑真大和尚の座像は、奈良の唐招提寺にある

## 高齢者対策として 欠かせない送迎バス

座像のレプリカで、鑑真記念館に展示している。また、豊富な海産資源に恵まれ漁業が盛んで、キビナゴや双剣サバなど有名である。そんな坊津泊漁港にほど近い海沿いに、南さつま市立坊津病院はある。目の前には坊津ならではのきれいな海岸線が続いている。坊津病院の前身は、昭和26年に西南方に開設され、市町村合併後名称を「南さつま市立坊津病院」と変え、平成18年に現在の建物を旧物の隣に新築し、移転した。診療科目は内科と整形外科。診



写真中央の大小2つの尖った岩が国指定名勝「坊津」の中にある  
双剣石

療日は月曜日から土曜日で、土曜日は午前のみの診療となつていて、が、時間外や休診日に来る患者もいるため、実質は24時間対応をしている状況である。

病床数は、一般病床が13床、療養病床医療型が26床、療養病床介護型5床、合計で44床。ここには、常勤医師が2人、非常勤の医師が3人、看護士29人、介護職員10人、作業療法士1人、管理栄養士1人、事務職員7人、その他3人の合計で56人の職員が勤務する。どの施設もそうだが、医師と看護師の確保には苦慮している。

「坊津地域唯一の入院施設を備えた医療施設として、住民の医療、健康の保持増進、福祉の向上に大きく貢献し、地域医療の砦として、さらには地域医療の拠点施設として、住民に欠かすことのできない診療施設だと思いますよ」

そう話すのは同病院の川崎豊海事務局長。平成27年度の1日の平均患者数は、外来患者数65人、入院

患者数35人という。同市の人口は平成28年3月末現在で、3万5494人（うち、坊津地域が3232人）だが、高齢化率は、市全体で37.4%、坊津地域では48.9%。少子高齢化が急速に進んでいる。

坊津地域は交通の便が悪いといふこともあり、診療日には地区別に患者送迎車を運行している。川崎事務局長は「送迎バスは、通院が



病院までの交通手段がない人も多いため、送迎バスは便利で貴重なサービス



「誰もが信頼し安心して身近に受診できる診療施設でありたい」と話す川崎豊海事務局長

## 「ありがとう」の言葉に励まされる

「特に困った事はないですか？」

「綺麗な柄の服だけどお父さんに買ってもらつた？」と穏やかに患者と会話するのは、同病院の鷺山健一郎院長。枕崎市生まれの鷺山

院長は、隣町の坊津に子どもの頃、海水浴や釣りによく連れて行つてもらつっていたので親しみがあつたとのこと。

「名前を『みる』のではなく、人を『みる』。地域密着だからこそ、患者の病気だけを診るのではなく、抱えている環境やさまざまな背景など全人的に患者を『みる』ことができる」と鷺山院長は地域医療の魅力を話す。

昨年は医師不足で、やむを得ず

1週間に5日当直したり、15日間連続勤務し、疲れ果てたうえに家族からは責められ、心が折れそ

困難な高齢者対策の一つとして欠かせない」と話す。高齢者の多い坊津地域にとって、坊津病院は身近な「かかりつけ医療機関」として、日常の診療や特定健診、インフルエンザ予防接種などのほか、24時間対応してもらえる地域にはなくはならない病院となっている。

エンザ予防接種などのほか、24時間対応してもらえる地域にはなくはならない病院となつていて、

恩賞の一つとして欠かせない」と話す。高齢者の多い坊津地域にとって、坊津病院は身近な「かかりつけ医療機関」として、日常の診療や特定健診、インフルエンザ予防接種などのほか、24時間対応してもらえる地域にはなくはならない病院となつていて、

ここでは自分の家族のように、親しみを持つて患者に接することができる。そして何より自分は『ありがとうございます』の感謝の言葉に励まされているのかもしれない

そして、健康管理に気を付け、十分な睡眠と栄養をとるようにして

いる。

「栄養については奥さんが、たくさんの野菜を使つたバランスの良い食事を作つてくれるので、助かっている。家族仲が良いからな

いです」

そう言い残すと、鷺山院長は嫌な顔ひとつ見せず、診察に戻つていった。

## 求められるのは医療と福祉の連携

病院の午後は、外来診療に加え、訪問診療や訪問看護などがある。

独居老人や足を患つた方等、病院まで来られない患者も多く、訪問診療で診てもらつていていう。坊津病院を出発して向かつたのは、病院から車で約20分の今岳地区の97歳の奥秀吉さん宅。訪問診



「永富先生に訪問診療に来てもらいたい」と話す奥秀吉さん



高齢者が分かりやすいように服薬の説明・管理を行う

筆頭での対応に心掛ける濱田薫外来師長



「私達の働きかけて在宅へ帰れる人もいる」 外来ロビーで近況を語り合う患者と話す金田呈苗療養病棟師長

療では、血圧・脈拍の測定、日常生活等について会話しながらの診察、内服薬の処方、服薬の状況確認などを行う。

「あれから変わったことなかつたですか？膝の調子はどう？ごはんはおいしいですか？」患者の顔をみながら診察を始めたのは、今年の4月から同病院に着任した永富尚子先生。診療だけでなく、何気ない会話が患者さんの心を軽くして、時には大事な情報を聞き出すことにもつながるという。

「地域の方々が地域を愛し、自分の住んでいるところを誇りに思っている。私は内科医だが専門以外の疾患も幅広く診ないといけないので、責任も大きいですが、やりがいがある」

地域医療で求められている医師像とは、さまざまな事態に対応できる、診療能力のある医師というべき地の医療機関で勤務している永富先生にとって、地域医療の魅力とはどんなところにあるのだろうか？

ことになりそうだ。地域医療の魅  
力とは、患者をトータルケアでき  
ることであり、また医師にとつて  
は自らの「幅」が広がったことでも  
ある。

そんな地域医療をこれからも  
守っていくために取り組むべきこ  
とは何だろうか？

「自宅で『老老介護』をされている  
方も多く、病院側からどれくらい  
サポートが入れるか、介護保険の  
利用等も含め、考える必要がある。  
そして、地域のことをまず知つて

## 価値観の変容が必要

「医療は患者さんの命、そして身体、『こころ』の健康を守るために必要なものであると考える。地域医療を守るためにには、医師や医療スタッフの育成、家族、地域住民の理解が必要。大都市から遠いと医師の研鑽の機会が減ることに加え、子供の教育や買い物の問題といった家族の問題も出てきて、医師本人は良くても家族が地方での生活を望まないといった問題もある。医師の大都市への集中、地方都市の過疎化を食い止める施策等、価値観の変容が必要だと考える」

目の前には、医師としての使命感、そして、地域医療を支えたいと、いう熱い想いをもつて奔走する医師の姿があつた。

もらい、医師不足で困っていることを皆さんにしっかりと知つてもらうことから始めるのが大事」

同市内の秋目診療所に向かつた永富先生は、地域への思いと情熱にあふれていた。

もらい、医師不足で困っていることを皆さんにしっかりと知つてもらうことから始めるのが大事

同市内の秋目診療所に向かつた永富先生は、地域への思いと情熱にあふれていた。

## 価値観の変容が必要

坊津病院に戻ると、外来から病棟まで忙しそうに飛び回っている鷺山院長となんとか会うことができた。地域医療を守るために、どのようなことが必要でしようか? 「医療は患者さんの命、そして身体、『こころ』の健康を守るために必要なものであると考える。地域医療を守るために、医師や医療スタッフの育成、家族、地域住民の理解が必要。大都市から遠いと医師の研鑽の機会が減ることに加え、子供の教育や買い物の問題といった家族の問題も出てきて、医師本人は良くても家族が地方での生活を望まないといった問題もある。医師の大都市への集中、地方都市の過疎化を食い止める施策等、価値観の変容が必要だと考える」

目の前には、医師としての使命感、そして、地域医療を支えたいという熱い想いをもつて奔走する医師の姿があつた。

# 平成28年度九州都市国民健康保険研究協議会

## 国民健康保険制度の改革に向けて、一步一歩課題を解決していく

5月12・13日に、第68回九州都市国民健康保険研究協議会の主催により、鹿児島市の鹿児島東急REIホテルで開催され、九州各县から都市の国保主管課長等202名が参加した。

(主管：国民健康保険団体連合会九州地方協議会、鹿児島県国民健康保険団体連合会)

この協議会は、国民健康保険等の制度及び運営等に関し、専門的な調査・研究並びに情報交換をするために設置され、各县持ち回りで開催されている。

### 県、市町村、国保連合会の 緊密な連携が重要

開会に先立ち、このたびの熊本地震により犠牲になられた方々に対し、哀悼の意を表すとともに、

心からのご冥福をお祈りするため、黙祷を捧げた。

はじめに、開催市として鹿児島市の松木園富雄副市長があいさつし、「平成30年度から都道府県が財



厚生労働省保険局  
榎本健太郎国民健康保険課長



鹿児島県保健福祉部  
下村一彦次長



鹿児島市  
松木園富雄副市長



国民健康保険中央会  
飯山幸雄常務理事

政運営の責任主体となり、国保運営の中心的な役割を担うこととなつた。市町村においては情報を共有しながら、国への要望や国保財政の安定運営に向けた取り組みを進めていかなければならない。本日は忌憚のない意見交換がなされるとともに、各都市の実務者同士のネットワークを築くなど、よりよい制度運営に貢献していただくことを大いに期待している」と森博幸市長のメッセージを代読した。

次に、来賓あいさつとして鹿児島県保健福祉部の下村一彦次長が、「国民健康保険制度を取り巻く環境については、高齢化の進展や医療技術の高度化などにより、医療費が毎年増加するなど、非常に厳しい現状にある。このような中、平成30年度から都道府県が国保制度の財政運営の責任主体となり、中心的な役割を担うこととなつて

### 市町村は地域におけるきめ細い 保健事業を引き続き担う

続いて、厚生労働省保険局国民健康保険課の榎本健太郎課長から、来賓あいさつに引き続き、「国民健康保険制度の改革に向けた取組等についての講演が行われた。その中で、榎本課長は、「都道府県が財政運営の責任主体となり、市町村ごとの国保事業費納付金の額の決定や保険給付に必要な費用を全額市町村に対しても支払う(保険給付費等交付金の交付)ことにより、国保財政の『入り』と『出』を管理する」と述べ、納付金・標準

おり、その安定的な運営に向けて、今後、県、市町村、国保連合会がなお一層緊密な連携を図りながら、各種事業の推進等に努めることが重要であることから、本協議会が果たす役割もますます大きくなるものと考える。本協議会において活発な意見交換が行われ、実り多い会議となることを期待するとともに、国保制度の安定化に向けた御指導、御助言をよろしくお願ひする」と伊藤祐一郎知事のメッセージを代読した。

保険料率の原則的考え方や算定ルールについて説明した。市町村は、地域住民と身近な関係の中、資格管理、保険給付、保険料率の決定、賦課・徴収、保健事業等地域におけるきめ細かい事業を引き続き担うこととなる。

国保制度改革における被保険者の直接的なメリットについての質問に対し、榎本課長は、同一都道府県内市町村間の住所異動に伴う高額療養費の多数回該当をあげ、平成30年度からは前住所地から通算して被保険者の負担軽減を図ると説明した。また保険者努力支援制度の前倒しについて、「平成28年及び29年度に実施する財源は、特別調整交付金の枠の中で実施し、規模については今後協議が必要である」と話した。

次に、国民健康保険中央会の飯山幸雄常務理事から、「国保における保険者機能の充実等について」と題して、公的医療保険制度における保険者機能や保健事業の必要性、国保・後期高齢者ヘルスサポート事業等についての講演が行われた。その中で、「国保連合会は健診、医療・介護のデータを使った国保データベースシステム（KDB）で、各保険者が取り組む保健事業の計画策定、実施を支援している。



古賀市市民部収納管理課  
長崎恵子主事

### 国への要望書を作成し、 8月上旬に陳情

2日目は、まず、議長団（議長・鹿児島市国民健康保険課の小川治幸課長、副議長・那覇市国民健康保険課の座嘉比光雄課長）が選出された後、昨年度の本協議会で決議された国に提出された陳情の結果等について、宮崎市国民年金課の熊野郁夫課長から報告があった。

続いて、研究発表に移り、古賀市民部収納管理課の長崎恵子主事が「古賀市の徴収の取組について」と那覇市健康部特定健診課の内嶺

データの提供だけではなく『保健事業支援評価委員会』を設け、公衆衛生等の専門家が入った委員会で、データヘルス計画を策定したという市町村を支援しているので活用してほしい」と話した。

また飯山常務理事からは、保険者協議会に期待される今後の役割や医療保険分野における情報連携等についても説明があった。



那覇市健康部特定健診課  
内嶺史恵保健師

史恵保健師が「那覇市CKD（慢性腎臓病）対策の試み／なはCKD48（フォーティエイト）」と題してそれぞれ報告があった。

その後、提出議題の協議に移り、代表者から提案理由の説明がされた。その結果、国庫負担金・補助金等関係では「退職者医療制度の廃止に伴い増加している保険者負担への財政支援を行うことについて」（大分県提出）等9題、医療保険制度関係では「マイナンバー制度における情報連携項目の不足を解消することについて」（福岡県提出）等11題、その他として「訪問マッサージにおける給付の適正化を図ることについて」（佐賀県提出）等2題、合わせて22題について今後議長団において整理集約され、8月上旬に陳情が行われる。

最後に、次期開催県として沖縄県（那覇市）での開催が正式決定され、那覇市健康部の大城弘明部長があいさつを述べて、全日程を終了した。

# 保健師ルポ

## 特性をとらえ、地域の力で 住みやすいまちづくりを目指す

湧水町役場

栗野保健センター

保健師

立野 梨絵

### 人と自然が織りなす 美しいまち

湧水町は鹿児島県の中央北端に位置し、総面積は $144\cdot29\text{ km}^2$ 、北から東にかけて宮崎県えびの市、南は霧島市横川町、西に伊佐市



保健センタースタッフの皆さん(筆者前列右から2番目)

及び薩摩郡さつま町、東は霧島市牧園町と接しています。地勢は、東の霧島連峰と北西の九州山脈矢岳支脈の両山系に挟まれ、東に霧島山系に属する栗野岳(標高1102m)、南西に国見岳(標高648m)を擁する火山灰土壤(シラス)に覆われた盆地状の地形となっています。

また、町の中央部を熊本県白髮岳に源を発する九州第二の河川、川内川が貫流しており、その流域は肥沃な耕地が拓け、水田地帯を形成しているほか、年中途絶えることなく冷水が湧き出でる竹中湧水や丸池湧水があり飲料水の水源や水田灌漑用水として利用されています。霧島錦江湾国立公園内にある栗野岳中腹からは、錦江湾、桜島、薩摩半島等が一望できる壮大な景観を呈し、豊かで美しい自然と景観の地域となっています。恵まれた自然環境の中で、住民がいきいきと輝き、まちが活気づくことを期待し、芸術文化活動の拠

及び薩摩郡さつま町、東は霧島市牧園町と接しています。地勢は、東の霧島連峰と北西の九州山脈矢岳支脈の両山系に挟まれ、東に霧島山系に属する栗野岳(標高1102m)、南西に国見岳(標高648m)を擁する火山灰土壤(シラス)に覆われた盆地状の地形となっています。

また、町の中央部を熊本県白髮岳に源を発する九州第二の河川、川内川が貫流しており、その流域は肥沃な耕地が拓け、水田地帯を形成しているほか、年中途絶えることなく冷水が湧き出でる竹中湧水や丸池湧水があり飲料水の水源や水田灌漑用水として利用されています。霧島錦江湾国立公園内にある栗野岳中腹からは、錦江湾、桜島、薩摩半島等が一望できる壮大な景観を呈し、豊かで美しい自然と景観の地域となっています。恵まれた自然環境の中で、住民がいきいきと輝き、まちが活気づくことを期待し、芸術文化活動の拠

点として風格のあるまち、また「人の心の美しさ(豊かさ)」と自然をはじめとする「まちの美しさ」を兼ね備え、活発な産業活動が行われる発展性のある町を目指して将来像を「人と自然が織りなす芸術のまち 心豊かで伸びゆく美しいまち」と設定しています。

### 高齢化率約38%

湧水町栗野保健センターは湧水町役場栗野庁舎より少し離れたところにあり、健やか推進室室長、母子保健係長、保健師4名(うち臨時職員2名)看護師2名、管理栄養士1名が毎日一緒に働いています。

湧水町栗野保健センターは湧水町役場栗野庁舎より少し離れたところにあり、健やか推進室室長、母子保健係長、保健師4名(うち臨時職員2名)看護師2名、管理栄養士1名が毎日一緒に働いています。小さな町だからこそ結婚力を高め、地域の力で住みやすくなります。小さな町だからこそ結婚力を高め、地域の力で住みやすくなります。保健センターではどの事業にも携わることができるため、家族やご近所の顔が見える関係づくりができるところです。

### 健診を受けやすい 環境整備に取り組む

湧水町の保健師として働き始めて10年目。看護師から保健師へ転職し、予防を第一に考える保健師と病気になっている人を助ける看



湧水町のマスコットキャラクター「ゆうたん」です

農村医学研究会で湧水町の現状を分析し、発表しました



護師では考え方も違うし仕事の内容も違います。個人でなく、家族単位で支援することも多く、対象とする範囲が広いため困難な部分もあり、大変な思いをすることがありますが、今は何とか仕事にも慣れ、湧水町にも慣れてきました。地域の方へも私が保健師であることが浸透してきたのか相談件数も増え、健康講話の講師として招かれることもあり、とてもうれしく感じています。私は成人保健を担当しており、今年も5月に特定健診が行われ、6月からの特定保健指導に向けて準備をしているところです。本町は健診を円滑かつ効果的に実施できるよう、集団健診の休日実施及びがん検診の同時実施など利便性を考慮した受診しやす

い環境づくりに取り組んでいます。また、自治会長による対象者への健診案内の戸別配布により受診意識の高揚を図るとともに健診未受診者に対しては町内放送や受診券の発送などで呼び掛けを行っています。

昨年からは特定健診と長寿健診を分けずに家族で受診できるように地区ごとに日程を設定し、7月8月の暑い時期を避け気候の良い5月に10日間行いました。結果少しだけですが受診率を上げることにつながりました。そして今年は特定健診料金を無料にしました。健康に関する意識の高さが受診率を左右すると思っていたが、少しですが受診率が上がってきたのでよかったです。このようにして今後も町民の意見を聞きながら健診のあり方などを検討し、健診を受けやすい環境づくりに努めていきたいと思います。

### 医療費分析からみえてきた課題

また、特定保健指導・結果報告会など健診後の指導をする際に湧水町の特徴として血压、血糖値の高い方が多いのに驚かされます。全体の医療費をみた時にも高血压、

糖尿病など生活習慣病にかかる医療費が高くなっています。これらの原因を質問票などから分析した結果、「1回30分以上の運動習慣のない方」、「1日1時間以上の運動を行っていない人の割合」が鹿児島県の平均よりも高く出ました。また「週3回以上就寝前に夕食を食べている」人の割合も高く、飲酒頻度が毎日の方も多いので食生活において血糖値をあげやすい習慣がされているのだと考えています。こうした結果をもとに運動する機会を設けるために健康教室を開催から月2回開催にし、講師の先生と協力し「どこでもできる運動」や「誰でも簡単に取り組める運動」などを考え方紹介し、体操方法を教えるチラシに工夫をするなどして多くの方に運動の機会を設けてもらえるように取り組んでいます。食事については教室で保健師、管理栄養士で生活習慣改善について健康講話をしたり、結果報告会では食生活改善推進員の協力をもらつて減塩みそ汁を試飲してもらうなどしています。生活習慣病は自覚症状がないためすぐには改善へとつながりにくいので特定保健指導は個別面接を行っています。無意識にしている生活習慣を意識して改善するためには、対象者とコミュニケーションを取り信

頼関係を築き解決策を一緒に考え支援していくことが大事です。個別だと具体的な計画が立てやすく、その人の生活にそついているので目標を達成しやすく効果的で成果も出ています。これまで事業の立ち上げ、内容などを保健センター内で話し合います。運動する機会を増やしてもらう目的で、「秋の夜長にヨガはいかが?」と参加者を募り、多くの参加がありました。



健康増進事業でヨガ教室を企画し開催。運動する機会を増やしてもらう目的で、「秋の夜長にヨガはいかが?」と参加者を募り、多くの参加がありました。

特定健診の受診促進の取り組み 東串良町

## 年1回健診いつど！が合い言葉

平成30年度より、国保（都道府県・市町村）については、特定健診・特定保健指導の実施率に応じた後期高齢者支援金の加算・減算制度に替わり、国保の保険者努力支援制度を創設し、特定健診・特定保健指導実施率といった適正かつ客観的な指標に基づき、保険者として努力を行う都道府県や市町村に対し支援金を交付するという医療費適正化に向けた取組も推進されることから、実施率の底上げが今以上に求められる。そこで、通院中の方からの情報提供と特定健診を受けていない方への受診の勧めを積極的に実施し、過去3年の受診率が伸びてきた東串良町の「特定健診の受診促進の取り組み」を紹介する。



健診の流れや年1回の健診受診を呼び掛ける宮之前祥子主査



食改による減量みそ汁試食＆普及活動



ミニドック形式の健診

東串良町は志布志湾の南端に面し、大隅半島のほぼ中央に位置しており、毎年4月から5月にかけて、柏原海岸ではルーピンが咲き、一面黄色い絨毯が敷き詰めたようになる。また町内の多くを肝付平野が占め、黒潮の影響で温暖な気候のため、ピーマンなどの栽培と超早場米の一大産地となっている。

保健センターを訪れたのは午前7時前。あいにくの雨にも関わらずたくさんの人々が列に並んでいた。6月のこの日は、4日間に渡つて実施される東串良町特定健診の最終日。同町の特定健診はがん検診も同時に受けられるセット健診になつており、保健センター前には検診車がずらりと並び、骨粗しそう症や胃がん、前立腺がん、腹部超音波など、ミニドック形式で検査が受けられる。（健診の流れは次の一覧）

仮受付（番号配布や受診券の確認）→検尿→オリエンテーション（流れや注意事項を説明）→受付→身体計測（身長・体重等）→血圧・問診→腹囲測定→採血（脂質や肝機能等）→眼底→医師診察→心電図→希望者はがん検診等へ。

東串良町の受診率は、平成26年度は47.8%で、これは平成23年度の受診率より18%高い数値です。そう話すのは、同町福祉課の吉永広史課長補佐。高いアップ率の理由の1つに、「かかりつけ医からの情報提供事業」があるという。通院中の方で特定健診の対象者は、かかりつけ医に情報提供の同意書を提出し、診療における検査データ等の情報を提供してもらうことで特定健診の受診とみなされる。そ

同時に受ける  
セット健診も充実

かかりつけ医からの  
情報提供

特定健診を毎年受診し  
さらには生活習慣病の改善に  
つなげもらいたい



吉永広史課長補佐



### ご本人記入欄

特定健康診査情報提供票

特富健康診查情報提供票[質問票]

ここで、平成22年度から特定健診の申込書にアンケート欄を設け、受診しない方に理由を記入してもらい、病院等で通院中のため受診しないと記入した方に、情報提供の同意書を提出してもらうよう依頼を始めた。その結果、平成26年度は、196人中101人から情報提供があり、これは特定健診受診者の13・1%にあたる。

ここで、平成22年度から特定健診の申込書にアンケート欄を設け、受診しない方に理由を記入してもらい、病院等で通院中のため受診しないと記入した方に、情報提供の同意書を提出してもらうよう依頼を始めた。その結果、平成26年度は、196人中101人から情報提供があり、これは特定健診受診者の13・1%にあたる。

「その他に効果的であつたのは、未受診者に対する受診勧奨です。」

健衛生係の宮之前祥子主査。平成24年度に8人の職員で、体制づくりから始め、電話や訪問による積

 極的な受診勧奨を職員で行つた。対象者の反応や特定健診に対する思い、未受診理由等を直接聞き、次年度の課題整理や対策の検討に活用しているという。また、平成27年度から特定健診・特定保健指導推進員として、5人を委嘱し、受診勧奨に取り組んでいる。

健診後のフォローの大切さを実感

受診促進の取り組みを行なう方、健診受診後の受診者へのフォローの必要性も感じたため、平成27年度からは集団指導として肥満や高血圧、高血糖、脂質異常の重症化予防対象者に対して、栄養教室・栄養相談を実施している。また、健診結果報告会で対象者へ個別指導を実施し、欠席者にもできる限り訪問時や来院時に個別指導を実施するようにもしている。宮之前主査は「特定健診受診で終わらせぬよう、個別指導や、特定健診後に精密検査を受けたかの確認などのフォローオーを継続していきたい」と今後の意欲をみせた。

特定健診は毎年受診し、自分自身の健康管理に役立てるもの。重篤な病気を防ぐためにも「毎年1回必ず受診」をぜひ、心掛けたいも